



前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開國中興伝誌

輯校本(試行本)並びに研究

大塚 秀高*

以下に掲げる輯校本(試行本)は、『前漢書平話続集』、『全漢志伝』、『両漢開國中興伝誌』それぞれの本文の、『前漢書平話続集』巻上に対応する部分を比較対照したものである。なお、利用に便ならしめるため、あわせて簡単な研究(凡例を含む)を附した。この輯校本の作成は、現在まで未発見で、すでに失われたと考えられている、『前漢書平話続集』に先行する作品を、明代にこれを改変してなったと考えられる『全漢志伝』ならびに『両漢開國中興伝誌』により可能な限り復元するための第一段階として、『前漢書平話続集』から『全漢志伝』ならびに『両漢開國中興伝誌』への改変の傾向を把握することを目的としている。なお、研究については、『前漢書平話続集』上中下三巻の輯校本作成が完了した段階で改めて詳細なものを執筆する予定であり、今回のものはその試稿である。

キーワード：『前漢書平話続集』、『全漢志伝』、『両漢開國中興伝誌』、輯校本

一 本研究の経緯と目的

明の万暦年間に福建で刊行された『全漢志伝』ならびに『両漢開國中興伝誌』の前漢部分、より正しくは項羽の死から景帝時代までが、これを遠く遡る元の至治年間に、同じく福建の書肆虞氏から刊行された全相平話シリーズのひとつ、『前漢書平話続集』を改変してなったものであることは、すでに橋本堯氏の「韓信の失脚——全相続前漢書平話から西漢通俗演義まで——」(『日本中国学会報』22, 1970)や、王古魯氏の『王古魯日本訪書記』(海峡文芸出版社, 1986)によって明らかにされている。これを承けた筆者は、「講史章回小説の出版と改変——『列国志』をめぐる——」(『中国古典小説研究動態』3, 1989)において、その間の事情をさらに追求した。

* おおつか・ひでたか, 埼玉大学教養学部教授, 中国文学

その後、それまで『前漢書平話統集』の「統集」に先行する作品の名称にあてられていた「正集」に対し、金文京氏から疑問が呈せられた。明の成化年間に刊行され、同じく上図下文の形式をとる説唱詞話『花関索伝』が、前後統別の四集からなることにもとづくものであった。いわれてみれば、元代の類書には前後統別新外遺とシリーズで刊行されるものが複数存在しているし、「講史章回小説の出版と改変」執筆時点で気づいていたことだが、『全漢志伝』や『両漢開國中興伝誌』の『前漢書平話統集』対応部分に先行する部分は、「正集」一集分とするには紙幅が多過ぎる。筆者はそこで「六統研究前後——『封神演義』と『前漢書平話』をめぐって」（『中国古典小説研究』8, 2003）において、問題の部分は「正集」一集分ではなく、「前集」、「後集」の二集分と想定するとともに、『前漢書平話』には統集に続く「別集」も存在していたのではないかと論じた（以下の議論はこの立場によっている）。

とはいえ、以上の想定を実証することはなかなか困難である。「統集」に先行する部分が存在し、その内容の多くが『全漢志伝』ならびに『両漢開國中興伝誌』に保存されているまではよい。だが、具体的に両者のどこが先行作品によった部分で、どこが新たに加えられたり修正されたりした部分であるかを推定するとなれば、当然なんらかの根拠が必要となってくる。なにより、『全漢志伝』と『両漢開國中興伝誌』の間にも相違が存在していた。幸い、先学の研究により、出版時期が遅い『両漢開國中興伝誌』の方が、かえって『全漢志伝』より『前漢書平話統集』に近いことが明らかになっている（もちろん「統集」部分についてだが）。この傾向は、『前漢書平話統集』に先行する「前・後集」（ならびに「別集」）にもおそらく貫徹されているであろう。ならば、『全漢志伝』ならびに『両漢開國中興伝誌』から窺える両者における改変の傾向性を把握することこそが、本研究によって復元される先行作品の正当性を保証することになるに相違ない。以下に掲げる輯校本は、この最終目標を達成するための、いわば第一段階における成果ともいえるものである。

二 輯校本作成の手順

輯校本作成における手順は以下の通りである。

三者の複写本ないし影印本を OCR ソフトで読み込み、それを並べて対照が可能となるようにした。その際、『前漢書平話統集』は話柄の切れ目を示す則目がないので、三者とも、上図にみえる図の説明の文字を、これに対応すると思われる箇所へ挿入することにした。またこれとともに、原テキストの葉数ならびにその表裏についても、17a) のように本文中に挿入して示すことにした。なお、使用した原テキストは

以下の通りである。

『前漢書平話続集』三卷

上海古籍出版社『宋元平話集』所収本（簡体字本） 1990

『全漢志伝』十二巻 名古屋蓬左文庫所蔵明万曆十六年余世騰刊本複写本

『両漢開國中興伝誌』六巻

名古屋蓬左文庫所蔵明万曆三十三年詹秀閩刊本複写本

後二者は木版本を写真に撮って紙焼したものである。当然、正体字、俗体字が混在するものとなったが、そもそも原本の状況を可能な限り保存することを目指すのが趣旨であったから、いかにしても印字不能な場合を除き、そのままとした。この目的ゆえに、OCRの読み込みには中国の業者を指名した。漢字文献の読み込みにおける精度が、日本の業者とは格段に違うからである。とはいえ、いかに精度がよくとも限度はあるから、「今昔文字鏡」まで動員して追加、補正をし、校正も複数の目で三度、四度と実施したが、いまだに完全に原本を復元したと言い切れる状態にはいたっていない。また、名古屋の蓬左文庫にでかけ、写真によく写っていない「のど」の部分の文字については確認したが、版木の傷みなどにより、いかにしても判読できない部分が残っており、それらについては□で示さざるをえなかった。ただし、そうした箇所であっても、根拠があり補える場合には（ ）内にそれを示した。明白な誤字、その多くは字形の類似ないしは同音による、についても、同様（ ）内にそれを示した。とはいえ、固有名詞の一部についてはあえてそうした作業をしなかったことを予めお断りしておく。そのテキストの特性とみなしたからである。

なお、『前漢書平話続集』については、本来内閣文庫所蔵本の影印本を使う予定であったが、今回は都合により活字本により、筆者において補正することにした（葉数ならびに表裏は原本によった）。『前漢書平話続集』については、今後影印本によったものに置き換えることにしている。今回試行本とした所以のひとつである。

三 輯校本の見方

以下、輯校本の見方につき簡述しておきたい。

輯校本にはアラビア数字、ローマ数字、○付アラビア数字、アスタリスク、ならびに大文字アルファベットが諸所に見えるが、これらは、三者の照応関係がより明白となるよう、筆者において便宜的に加えたものである。

上図の説明文（太字とした）に附されたアラビア数字は、それが同一巻内で登場する順を示している。物語の展開と上図の順が一致しない場合があるため、この措

置をとった。なお、上図の説明文のほか、則目・巻目など、話柄の区切れを示すものも太字で示している。

ローマ数字は、『前漢書平話統集』のパラグラフを示すべく、筆者において附したものである。異論の余地のないよう努めたつもりだが、そもそも筆者の今後の論証を便ならしめるべく附したものであるし、話柄といえるほどのものがなく、一行で終わっているものもあるから、改善の余地はあろう。試みに附したものとみていただければ幸いである。

『前漢書平話統集』所収の詩には○付アラビア数字を通しで附し、『全漢志伝』、『兩漢開國中興伝誌』にこれと同一ないしほぼ同一の詩が見える場合には、それらにも同じ番号を附した。詩の増減や移動を一目瞭然としようとしたからである。なお、詩には『前漢書平話統集』になく、『全漢志伝』と『兩漢開國中興伝誌』に共通するものもあるのだが、それらにはあえて符号や番号を附さなかった。

アスタリスクは、『前漢書平話統集』にない、いわば『全漢志伝』や『兩漢開國中興伝誌』で新たに加わった話柄を示している。『全漢志伝』にはそうした部分が多いので、通し番号にかわり、大文字アルファベットを附した。ただし、それがあまりに短い場合には、なにも附さなかった。改変の一種とみなすことにしたからである。

四 『全漢志伝』から『西漢通俗演義』へ

以下、『前漢書平話統集』上巻と『全漢志伝』、『兩漢開國中興伝誌』、ならびに『西漢通俗演義』のこれに対応する部分を比較した結果を簡述することにする。なお、比較の対象範囲は、既述のごとく『前漢書平話統集』上巻部分と、『全漢志伝』ならびに『兩漢開國中興伝誌』のこれに対応する部分であるが、『前漢書平話統集』上巻冒頭部分は先行する「前・後集」の末尾であって（「統集」の上図も「五侯献項王頭争功」から始まっている）、そこまでで語られた項羽の生涯を総括した部分であるから、『全漢志伝』巻三冒頭の「韓信回兵訪異人」以下に対応する部分に限った。『兩漢開國中興伝誌』では「漢王平魯即位封賞功臣」以下がこれにあたる。

ひるがえって、『前漢書平話』を構成する各集の区分けが物語の区切れと一致しない理由としては、かつて筆者が集を構成する上、中、下三巻がほぼ等量であることについて考えたと同じ力、すなわち各巻ならぬ各集をほぼ等量にしたいとする書肆の経営戦略が働いたのかも知れない。しからば、「前・後集」各三巻は、各巻十一葉程度からなっていた可能性があることになる。

閑話休題、上述の比較の結果としてまず挙げるべきは、『全漢志伝』と『西漢通俗

演義』の関係が非常に近いということであろう。

『西漢通俗演義』の現存最古の刊本は、宮内庁書陵部所蔵の金陵周希旦大業堂重刻本で、その刊行は万曆四十年とされる。『両漢開国中興伝誌』の刊行からわずか七年後のことである。原刻本の刊行はこれをさらに遡ることになるから、両者の出版時期はもっと接近していたに相違ない。しかし、遺憾ながらこのテキストには影印本がいまだに作られていない。そこで、便宜的に内閣文庫所蔵の金閨書業堂刊の『新刻劔嘯閣批評東西漢演義伝』の西漢部分を比較の対象とした（以下でいう『西漢通俗演義』はこれ）。実は内閣文庫には同名の刊行書肆不明の明刊本が蔵されており、内閣文庫蔵の新刻劔嘯閣批評本にしても当然そちらを比較の対象とすべきなのだが、これまた影印本がないという理由で、清刊本であり、大業堂本とは若干文字も相違する金閨書業堂刊を使用せざるをえなかった（ゆまに書房、『対訳中国歴史小説選集3』所収、1983）。なお、両者の相違については、ゆまに影印本の末尾に附された徳田武氏の「解説」、ならびに筆者の前掲論文によらねばならない。

『全漢志伝』に『前漢書平話統集』や『両漢開国中興伝誌』にない話柄が多数登場することは既述したが、その多くが『西漢通俗演義』にそのまま、ないしは拡大して踏襲されていた。AからRの全18の話柄（輯校本を参照されたい）のうち、『西漢通俗演義』にまったく受け継がれなかったものは、A、Rなどわずかに過ぎない。

このうちAは韓信、Rは陳稀（陳豨）に関わる。そもそも演義は多少とも荒唐無稽な部分を含む平話をより史実に近づけようとする意識のもとに作られている。それゆえ、『全漢志伝』に初出する、韓信が異人に未来を予言される話柄Aは、史実がないとして省かれる運命にあったに相違ない。まして、その『全漢志伝』においてもこのAに対応し、予言の実現を語る部分が欠けている以上、やむをえない措置だったといえよう。

一方、Rの削除は引き続きXⅧの「陳稀投北蕃」の改変とセットで考える必要があろう（以下、『前漢書平話統集』の話柄には、筆者において適宜与えた名称を附しておく）。陳稀の反乱の経緯を、『前漢書平話統集』は、IX陳稀造反→X分付国事→XI征陳稀→XII隋何招安→XIII会戦→XIV青遠告変→XV斬韓信→XVI韓信総括→XVII招伏四将→XⅧ陳稀投北蕃の順に語る。XIIで隋何は代州の陳稀のもとに招安に赴くが、城外から呼びかけるに過ぎない。漢軍勝利の決め手となったXVIIで語られる四将への買収工作は最後の最後の段階でなされたことになっており、天文を見て自身の衰運を知った陳稀は、自ら一家眷属を率いて北蕃に去ることになっていた。以上の諸点は『両漢開国中興伝誌』にもほぼそのまま踏襲されている。しかる

に『全漢志伝』はこれを大幅に改変した。韓信内通の密告者を青遠から謝公着に変え、隋何は最初から買収工作を行うことにした。それゆえ、「招伏四将」は「四将衆議」と変えざるを得なくなった。かつて買収工作を受け、一度は寝返りを試みた四将が、合議して陳稀の寝首を搔こうとするとしたのである。『西漢通俗演義』はこの最後の部分を再度改め、陳稀が樊噲に刺殺されることにしている。

前漢書平話統集上巻・全漢志伝・兩漢開國中興伝誌・西漢通俗演義話柄対照表				
話柄	前漢書平話統集	全漢志伝	兩漢開國中興伝誌	西漢通俗演義
項王総括	大漢五年十一月○	×	大漢五年十一月○	大漢五年十二月○
司馬遷	○	○	○	○
西漢君臣論	○+●	○+●	○+●	×+×+述贊
*疑韓信	×	△(場所不記)	×	×
I 五侯	○	○	○	△+後史
	×	*項伯	*虞姬	*項王廟+*項伯
II 平魯・群項	○	△	○	△
III 定陶觀望	○+●	○	*疑韓信+○	*疑韓信+×
改封韓信	○	○	○	○
彭越・英布	○	×	○	(×)(勿得視為輕重也)
IV 泗(汜)水上疏	○+疏	○+疏	×	×
*A異人言休咎	×	△	×	×
*B漂母・惡少	×	△	×	×
V 罵入咸陽	○	×	○+表	×
*C漢王即位	×	大漢六年正月罵還洛陽…即皇帝位于泥(汜)水之陽	×	大漢六年正月…二月+即皇帝位于汜水之陽+詔
*D封功臣	×	△	□	△
*E尊太公・封義異	×	△	×	(×)
*F沙中偶語・丁公雍齒	×	△	×	△
*G郭千秋論功	×	△	×	×
*H叔孫通	×	△大漢七年冬十月	×	(×)
*I田橫	×	△+詔	×	彭越・英布+△
VI 季布	○+●	△	○	△
*J裏敬論形象	×	△	×	△+表
VII 鍾? 末	○+●	△(獨無一人知之者)	○	△(獨無一人知之者)
VIII 論韓信	○+●	△(高鳥尽…)	○	△(高鳥尽…)+*惡少+叔孫通+太公
*K高祖之能	×	△	×	×
*L白登被圍	×	△	×	△
*M封陳平	×	△	×	△+王氏曰+*未央宮+高祖之能
	×	×	×	*張良
	×	×	×	*和蕃公主
	×	×	×	*一次要立如意
IX 陳? 造反	○	△	○	△
X 分封國事	○	△	△	△+*召蕭何
XI 征陳稀	○	○	○	○
*N 四壯士	×	△	×	△
XII 隋何招安	○	△	○	△
*O 隋何買囑	×	○	×	○
XIII 金帛	○	△	○	△
*P 謝公着告變	×	△	×	△
XIV 青遠告變	○	△	○	△
XV 斬韓信	○	△	○	△
XVI 韓信總括	○+大漢十一年九月	○+大漢十一年九月	○+大漢十一年九月+詞	○+大漢十一年九月
*Q 曉示信首	×	△	×	△
XVII 招伏四將	○+大漢十一年二月	×	○+至十一年三月	×
*R 四將衆議	×	△	×	×
XVIII 陳稀投北蕃	○	○	○	×+*陳稀被殺

○: (前漢書平話統集では)左端の話柄が存在する。(全漢志伝・兩漢開國中興伝誌では)表現に大差はない。
 △: 左端の話柄は存在するが、文章は異なる。△同志は表現に大差はない。
 △: △の話柄を詳しくしたもの。
 ●: 講師のコメントまたは嘆き。

五 『前漢書平話統集』から『全漢志伝』へ

そもそも『前漢書平話統集』にあつて、物語の舞台は曲阜→定陶→泗水(汜水)→咸陽と移動する。史実によれば、魯を平定した漢王劉邦は定陶に至り、そこで齊王韓信の軍を奪い、二月に汜水の北で皇帝に即位し、洛陽を都とした。だが、婁敬の意見を入れ、引き続き車駕を西に進め、長安に都を遷した。『資治通鑑』巻十一によれば、すべて高帝五年のことであつた。『前漢書平話統集』は婁敬とその建言に言及しない。だから洛陽をとばし、いきなり咸陽を都としていっこう差し支えはなかつた。否、正確にいえば『前漢書平話統集』にも洛陽は出てくる。Ⅱ平魯に、最初は「天下以(已)定、大小軍兵將士還於洛陽」と、二度目は「楚既滅、魯已(王)百姓皆降。漢王令諸侯皆帰還帰関中、入洛陽、商議封賞功臣」と、二度に亙り洛陽が見えるからである。とはいえ、最初の洛陽帰還は張良に止められて実現せず、二度目のそれは関中帰還の帰途に洛陽で封賞を実施しようとしたと読める。また、そうでなければ直後の定陶、汜水と矛盾しよう。『両漢開國中興伝誌』はこの二箇所をそれぞれ「王命大小將士、俱還洛陽、聴候封賞」、「漢王伝命諸侯將士、俱入洛陽、聴候封賞」と替える。これならいずれも洛陽到着後に恩賞を与えると命じたと読める。

既述のごとく、『全漢志伝』が新たに加えた話柄のひとつに婁敬のそれがあつた。婁敬に言及する以上、洛陽を都とした事実を書かないわけにはゆかない。そこで、『全漢志伝』は全体の流れを、定陶→改封韓信→韓信関係の新話柄A、B→汜水即位と改めるとともに、『前漢書平話統集』の「有日、駕到咸陽、高祖帰宮、衆將各帰宅」を「大漢六年正月、駕還洛陽」と替え、咸陽を洛陽とすることにより平仄を合わせようとした。だが、続く「二月甲午即皇帝位於汜水之陽」の処置に困り、汜水を泥水と替え糊塗しようとした。汜水は洛陽の東にあり、汜水のままで東帰することになってしまうからである。案ずるに、泥水は汜水の誤刻などではなく、意図的にこれと替えたものだったに相違ない。この新たな矛盾が出来た所以は、あげて上疏と即位の間にA、Bの話柄ならびに「大漢六年正月、駕還洛陽」の文言を加えてしまったことであつた。これに気づいた『西漢通俗演義』は、A、Bの話柄ならびに汜水上疏を省いてしまった。とはいえ、高祖即位の年を大漢六年とする『全漢志伝』の誤りは踏襲している。当時新年は十月に始まることに、『全漢志伝』の編者のみならず、『西漢通俗演義』の編者も気づかなかつたのである。

以上、話柄を中心に『西漢通俗演義』が『全漢志伝』から発展したものであることを論じたが、共通する表現の存在により、それを証することもできる。有名な「高取尽、良弓蔵。狡兔死、走狗烹。敵国破、謀臣亡」という言葉も、この両者のみに

見え、『前漢書平話統集』や『兩漢開國中興伝誌』には見えないからある。

六 『前漢書平話統集』から『兩漢開國中興伝誌』へ

次は『前漢書平話統集』と『兩漢開國中興伝誌』の関係について論じたい。

『兩漢開國中興伝誌』は『前漢書平話統集』の話柄をほぼ踏襲する。したがって、『前漢書平話前、後集』を復元しようとするなら『兩漢開國中興伝誌』をおいてよるべきものはなかろう。『全漢志伝』や『西漢通俗演義』と異なり、『兩漢開國中興伝誌』はただの一度しか出版されなかった。この事実こそ、『兩漢開國中興伝誌』が時代の潮流に棹差し、伝統の孤塁を守った証といえるかもしれない。この意味で、『兩漢開國中興伝誌』の現存は真に貴重である。ただし、その『兩漢開國中興伝誌』にしても、『前漢書平話統集』と一字一句変わらないわけではなく、むしろ相当異なるという方が正しい。当然相違には増削二通りあるが、後者の場合が多い。

増補にはふたつのケースがある。ひとつは『前漢書平話統集』になかった上表文や詩詞を補うというもので、Vに見える諸臣が漢王に即位を勧める表や、XVIの韓信を悼む詞などが挙げられる（ただし、前者は先立って省かれた汜水上疏の埋め合わせ的な意味合いも持っており、純粹な増補とは言いがたい面がある）。もうひとつはごく少数の、話柄を増補したケースである。それらはほぼ例外なく先行する『全漢志伝』に見えるものを襲ったものであるが、なにがしかの変更を加えている点に特徴がある。いってみれば、『全漢志伝』の試みた創作のごく少数を修正して採用した形になっているのである。たとえば、『前漢書平話統集』のIで、漢王は項羽の家族を保護するよう通達をだしている。これを受けた『全漢志伝』は、続けて項伯が張良を頼ってやってきたことを述べる。これは『資治通鑑』に「諸項氏枝属皆不誅。封項伯等皆為列侯」とあるのに依拠したものと思われるが、『兩漢開國中興伝誌』は項伯にはまったく触れず、かえって虞姫に言及する。

『全漢志伝』には、今回三者比較の対象とした部分の直前、卷二の末尾に、漢王が韓信の威勢に疑念を抱く部分がある。項羽の評価を総括した後に、きわめて唐突に、どこでいつといった具体的な記載がないまま語られている。この記述は、IIIの、定陶に至った漢王が韓信の陣営のりっぱさに驚き、突如韓信を斉王から楚王に改易した事の伏線とすべく、『全漢志伝』の編者が新たに書き足し、卷二卷末に置いたものと思われる。しかし、『全漢志伝』のごとき話の流れでは、漢王の疑念出来の所以があまりに唐突であるし、いかにも話が重複している。そこで、『兩漢開國中興伝誌』の編者は、『全漢志伝』卷二卷末の内容をIIIと合体させてしまったのである。かくし

てこの部分、三者のうちでは『両漢開國中興伝誌』が最多最長となった。しかし、合体させても重複は重複である。おそらくそれゆえであろう、『西漢通俗演義』はこの部分を『両漢開國中興伝誌』から受け継ぎながら、思い切りよく、定陶で漢王が韓信の陣営に驚く場面を省いてしまった。

『両漢開國中興伝誌』が『前漢書平話統集』から省いたものとしては、このほかに講釈師のコメント風の文章があげられる。たとえば、定陶の末尾にあった「漢王問曰：自古喪大業宗禪者，其所斬有由矣。三世以嬖色取禍，嬴氏以奢虐政失，西京自外戚失祚，東都縁闖尹傾国」がそれである。この部分、後漢の命運にまで言及しているから、漢王の言葉のはずはなく、「漢王問」の三文字はおそらく「後人嘆」のような文字であって、この部分全体が講釈師の批評であったと思われる（ちなみに、この後に詩が二首挙がっている）。

このほか、講釈師や子房により繰り返しなされる韓信の運命を嘆くコメントも、『両漢開國中興伝誌』からはすべて省かれている。Ⅵ季布，Ⅶ鍾離末，Ⅷ韓信に見える、「不因行此聖旨，致使君臣失義；信有十大功劳，変作斬鬼」、「子房嘆曰：楚韓信休也」、「時有子房独坐思想：高祖将韓信欲斬之，更奪了軍權，雖亦免罪，久後不免死於漢王之手」がそれである（これらは『全漢志伝』にも見えないが、『全漢志伝』のこの部分、そもそも文章が『前漢書平話統集』から一変しており、比較の対象とするには無理がある）。平話から演義に変わるにつれ、こうしたコメントは削られてゆく運命にあったに相違ない。

なお、ここで注目されるのは、講釈師にかわって、子房、すなわち張良が嘆きの主体となっていることである。『前漢書平話統集』には張良と韓信を対比させるといふ明確な意図があったに相違ない。

七 小結

最後に、『前漢書平話』、『全漢志伝』、『両漢開國中興伝誌』の三者と『西漢通俗演義』の関係につき、いささかまとめておきたい。元代に出版された全相平話シリーズのうち、前漢部分が万暦三十三年の『両漢開國中興伝誌』刊行ころまで福建に伝わっていたことは確実で、『両漢開國中興伝誌』はそれをやや簡略にして継承する一方、些少の部分については、すでに刊行されていた『全漢志伝』を修正して採用した。独自に増補した部分もあるが、多くはなさそうである。

『全漢志伝』の現存最古の刊本は万暦十六年の余世騰刊本だが、これ以前の嘉靖年間には原『全漢志伝』がでていたらしい（詳しくは上記の拙論を参照されたい）。

余世騰刊本以後も、加筆部分を増やしつつ、書肆を替え、たびたび福建で刊行された。しかし、『東西漢演義』の劍嘯閣批評本の出現に圧され、やがてその姿を絶つにいたったらしい。

『西漢通俗演義』の原刻本の出現時期は、現在のところ不明といわざるをえない。かつて筆者はその嘉靖本の存在を想定したこともあった。ならば、『西漢通俗演義』の原刻本が『全漢志伝』のそれ以前に刊行されていた可能性も皆無ではなくなる。しかし、清刊の書業堂刊の劍嘯閣批評本による限り、その可能性は否定される。『西漢通俗演義』は、万暦三十年代の後半に至って福建をでた『全漢志伝』（ならびに『両漢開國中興伝誌』）が、金陵などの江南諸地域で変身をとげたものとみておくべきであろう。ただし、それはあくまで劍嘯閣批評本による暫定的な結論であって、最終的にそれを確認するには、現存最古の大業堂本による調査が欠かせない。

『西漢通俗演義』の特徴は、『全漢志伝』に存在していた、史実に近づけるという方針を徹底することにあった。『全漢志伝』と『西漢通俗演義』の相違は、前者は『前漢書平話』を尊重し、『資治通鑑』にもとづき編纂され、『全漢志伝』の編者が改変にあたって依拠したと思われる『歴史綱鑑補』などと明白に一致しない場合を除き積極的に改変しなかったのに対し、後者は『歴史綱鑑補』などにあわせるため、『前漢書平話』による部分も遠慮なく改め、削除さえした点にある。案ずるに、『前漢書平話』が伝わっていた福建にはその呪縛が多少なり残っており、それに依拠した部分への改変は憚られたが、それが姿を消して歳月を経ていた江南地域には遠慮などかけらもなかった、否、どの部分がそれにもとづくか皆目わからず、遠慮のしようもなかった結果ではなかったか。とまれ、『全漢志伝』は福建をでることにより、『前漢書平話』の呪縛から解放され、『西漢通俗演義』に変身をとげたのである。

【追記】本輯校本の作成にあたっては、早稲田大学大学院文学研究科博士課程の伴俊典君にひとかたならぬお世話になった。この輯校本を使用した演習に参加し貴重な意見を述べてくれた、東京大学大学院人文社会系大学院博士課程の上原究一、馬場昭佳、林桂如、修士課程の荒木達雄、鈴木弥生、蕭涵珍の諸君とあわせ、感謝の意を表す。

前漢書平話續集，全漢志傳，兩漢開國中興傳誌

輯校本（試行本）并研究

大塚 秀高

下面刊載之輯校本（試行本）就是『前漢書平話續集』、『全漢志傳』、『兩漢開國中興傳誌』三個文本的，限于『前漢書平話續集』卷上部分進行比較對照的。另，為使用時的方便，加上了簡單的研究（包關凡例）。作成這本輯校本的目的，是為復原到現在還沒發現而且認為已失掉了的『前漢書平話續集』所連續的作品，要把握從『前漢書平話續集』到『全漢志傳』和『兩漢開國中興傳誌』的改變的傾向。所依據的資料是，到明代把它改變而成的『全漢志傳』和『兩漢開國中興傳誌』。在此要說明一下，這次的研究就是將來完成『前漢書平話續集』上中下三卷部分的輯校本以後再寫的比較完全的稿子的嘗試稿。

關鍵詞：『前漢書平話續集』，『全漢志傳』，『兩漢開國中興傳誌』，輯校本